

《2004年6月例会報告》

【期 日】2004年6月29日（火）19:00～21:00

（その後茗荷谷駅前日本海にて飲食～11:30→池袋にて2次会～2:00頃→それぞれ）

【会 場】NPO法人「文京教育トラスト」事務所

【参加者（会員）】麻生征宏（学研） 泉優二（萩中サッカークラブ／作家） 上間匠（東京大学大学院） 小林俊文（群馬県立渋川青翠高校） 嶋崎雅規（帝京高校） 田中理恵（(株)日本能率協会総合研究所） 土谷享（KOSUGE1-16／美術家） 徳田仁（(株)セリエ） 内藤隆（ビッグバンスポーツ） 中塚義実（筑波大学附属高校） 安松幹展（立教大学） 山中麻耶（YMCAスポーツ専門学校・健康福祉専門学校）

【参加者（未会員）】篠塚太郎（日央ライフサービス(有)／カルチャーツスポーツクラブ） 志村光一（文京教育トラスト） 塚本正昭（文京教育トラスト） 名方幸彦（文京教育トラスト） 中山弘子（萩中サッカークラブ） 丸山和男（郁文館中・高校）

【テーマ】英語とサッカーセミナー

【報告者】麻生征宏、NPO法人文京教育トラスト

【報告書作成者】麻生征宏

注) 参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

英語とサッカーセミナー

麻生征宏(学研) 塚本正昭(NPO 法人文京教育トラスト)

1. はじめに

1) 当セミナーと報告者の関係

2003年5月、中塚氏より「英語とサッカーを教えたい」というイングランド出身の青年が船橋にいるとの情報がサロンMLで流れ、それへの返信をきっかけに、7月末に開催されたセミナーに関わる（小冊子にて全国の中学校へ情報提供）。

2004年4月、最初の情報の提供元である千葉大学の藤田幸雄氏より文京区に同様の青年がいるとの連絡があり、5月3日に藤田氏、中塚氏、ブライアン・ギャラハー氏、スティーブン・ブルックスミス氏、麻生で、今後の活動についての会合を持つ。

5月13日、筑波大学附属高校でテストセミナーを行う。NPO法人文京教育トラストの方々も同席し、視察。

5月末にテストセミナーを行い、6月よりNPO法人文京教育トラストこどもステーションで月2回のセミナー開始。現在に至る。

2) NPO法人文京教育トラストについて

NPO法人文京教育トラスト（以下文京教育トラスト）は、文京区の地域住民が主体となって、学童保育の対象外となる小学校4年生以上のこどもの居場所づくりをめざし、2001年に設立された。文京区の地域に根ざしたコミュニティスクールとして2002年4月より、文京区教育センターを中心としてこど

もステーションを開設。さらに、英語教室、サッカー教室を展開。2003年からは農業体験も開始。現在では、家族向けや大人向けのプログラムなども開始し、地域住民の活動の場として事業を展開している。くわしくは、<http://www.bunkyo-trust.jp/> を参照してください。

2. 文京教育トラストでの活動状況

1) 塚本氏（文京教育トラスト）より概要報告

まず、ブライアンセミナーを（筑波大学附属高校で）初めて見たときに、教え方のテンポがいいという第一印象を持った。それで、まず来てもらって、やってもらおうと思った。当日、さっそく事務所に来てもらい、契約内容について話し合った。ブライアンの希望の金額とは違ったが、文京教育トラストのサッカー教室の金額（1回500円）に合わせて行うということで合意し、契約した。

5月28日に第1回のセミナーを行った。それぞれの都合から、ブライアンに金曜日、ステューブんに水曜日に来てもらうことになった。6月はすでに2回実施している。時間は90分で、英語のみで行っている。1回に参加するのはだいたい40人。

2) 文京教育トラストのサッカースクールの概要

もともとは、子どもの居場所をつくろうというところから始まり、公園に集まった人でボールを蹴ろうというぐらいのところからスタート。そのうち、クーバーサッカーコーチングスクールのコーチを受けて行うようになった。現在では、学生がボランティアで数名常駐しており、3～5人で毎回のサッカー教室を担当している。

参加者は、幼稚園から小学生で、計77名（うち幼稚園14名）になる。

3) 質疑応答など

Q：実際子どもはどういう反応をしているか

A：文京区という地域性もあり、すでに英語に関わっている子どもが多い。また、外国人を特別視する意識も弱いので、英語、日本語に関わらず積極的に話しかけたりすることが多い。

Q：これまでにこのような活動はあったか

A：以前にはナイジェリア人が来たこともあった。彼らは報酬を望んでいるので、結局続かなかった。

3. ディスカッション（意見交換）

1) 英語（語学）とサッカーの関連について

- ・クラブを運営する側から考えてみると、子どもが英語に興味を持つとはどういうことなのか。英語でなければどうだろうか。あるいは、外国人がサッカーをやっているというだけでウリになるだろうか、と考えることがある。
- ・6年ほど前に、群馬で英語教員（日本人）を動員して英語とサッカーというのをやったことがある。すべてとにかく楽しくやろうという発想でやった。娘が参加していたが、英語にも非常に興味を持ち、今でも自分で進んで勉強するようになっている。
- ・英語も（サッカーも）入り口は楽しくやるのが大切。しかし、どこかで楽しみだけではなく超えなくてはいけない部分が出てくる。

2) サッカーであることの意味について

- ・留学していたときの経験では、サッカーはコミュニケーションツールになった。世界共通であることの意味は大きいと思う。体を動かすということは、大事だといわれている心とのバランスを作り出す

- のに役に立つのではないか。また、頭を使わないとプレーできないというのも重要な要素だと思う。
- ・日本はまだまだ野球だが、1対1が重視される野球と、全体が重要になるサッカー（の様なスポーツ）の違いもあるだろう。
 - ・サッカーの中には、あまり外に出ずにいると味わえないことがたくさんある。いろんな場面があり、心を動かすべきところが多くある。
 - ・サッカーをやっている子どもは、英語もやってみようと思うかもしれないが、英語教室に来ている子どもにサッカーをというのはなかなか難しい。

3) スポーツだからできること、今後への展望など

- ・子どものサッカークラブをしているが、子どもを見ていると、明らかに運動能力が低下しているのがわかる。どんなかたちでも、何か魅力があるからサッカーもやってみようというように思わせるのも方法かもしれない。
- ・高校で部活動を教えていても、動きの経験が少なく、転び方も知らないと思うことがよくある。体の使い方を知らない。部活の種目に限らず相撲をさせたり、いろんな経験をさせたりしている。
- ・スポーツもやはり複数のもを経験をさせるべき。そのためにはシーズン制がやはりよいのではないか。
- ・部活動やクラブでは、少ない人材を「取られたら困る」と思っている。そこを変えなければ。登録の問題もあるかもしれないが。
- ・多様性、様々な文化の理解などにつながるはず。美術の観点から見ても、複数のもを経験をすることは、引き出しを多くすることになる。
- ・地域という一貫した盛り上がりが必要ではないか。人材を活かしたり、環境づくりが肝心。
- ・英語（には限定しないが）で、複数のスポーツをつなぐという方法もとれるかもしれない。
- ・子どもが自分から「動きたいな」「やってみたいな」という気持ちを持つような場づくりをしていけたらいいと思う。

4. 報告書作成者（麻生征宏）感想

報告の題材はホンの小さなことでしたが、「教育」というつながりで多くの方々にお集まりいただき、大変盛り上がり、非常に刺激的な会になったと思っています。

発表の手順や、議論の方向性を考えて望みましたが、そんなものがなくとも、いつのまにか考えていた方向性で、考えていた以上の議論が展開されました。

みなさんが、やり方や関わり方こそ違え、スポーツや教育の実践の先に何かしらの共通した「想い」を見据えているんだなということを実感しました。これは大きな収穫でした。ただ、そう簡単には解決できない本質的な部分にも触れた議論でもあり、ここから、実践として、既存のものを乗り越えるような何かを生み出せるかということが問われるような気がします。今後も議論や実践を深めたいところです。

また、すでに素晴らしい発想で取り組んでいることも共有できました。サロンの醍醐味を垣間見た月例会でした。ありがとうございました。